子どもの思いを追って

津守　真

はじめ出会ったときには、たいした意味もありそうにない行動と見ていたことが、一日を子どもと一緒に過ごすうちに、そこには子どもの思いがあったことを知らされる。子どもはそれぞれの思いを心に抱いて一日を生きている。その一日だけでなく、日々を貫いて子どもの生活の底に流れている思いもある。

ある朝、T子が庭のブランコの上の高い所に乗ったまま部屋に入ってこないんですと、母親が私に知らせにきた。いってみるとブランコのわきの木に上り境界の金網に足をかけている。かなり以前に、T子はこの同じ場所で金網の向こうにいきたくて、一日中そこを離れずに不満気な低い声を立てていたことがあった。それが数日もつづいたので、そんな

にいきたいのならばと私が手をかして金網の向こう側におりた。T子は境界の外をひとめぐりして門から入ってきた。金網の外側から内側へと空間を自分の足で歩いてたしかめればそれでよかったのである。次の日から、T子はその場所に留まらず、学校中の高い所や低い所を、地下室から二階の片隅まで歩きまわった。T子は学校の空間を細部にわたるまで自分のものにすることを試みているように見えた。

この日私の傍に立っていた見学者に私はこのことを話すと、その人は「ただ高い所に上っていると見えるだけの子にも、それなりの思いがあるのですね」と云った。私はいい点に気が付いてくれたと思った。

この朝ブランコの上から離れなかったT子に、金網の向こう側にいきたければ一緒にいくよと声をかけたが、この日はそうしたいのではなかった。私の肩や頭の上に片足をかけ、片足を樹木やブランコにかけて動き回った。大人によりかかることを求めているT子の気持が次第に私に伝わってきた。午後になってT子は保育室の隅の中二階の狭い空間で、数人の子どもたちと一緒に、テープの音楽をきいて長い時間を過ごした。他の子と身体を寄せ合って狭い空間にいることがこの子に快くなってきたように思った。子どもと一緒に生活をつくっていくうちに、子どもの心にある思いが、次第に大人に明瞭に見えてくる。

＊＊　＊＊　＊＊

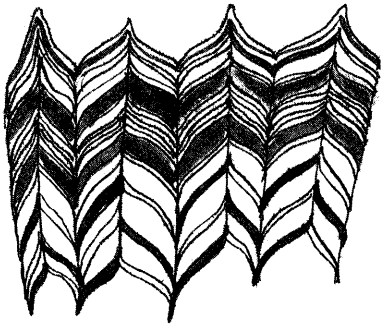
私が床に腰を下してひとりの子どもの相手をしていたとき、三才になる職員の子どもが傍で紙を破いていた。はじめは一枚のわら半紙をおそるおそる破いていたが、そのうちに次々に細長く破きはじめ、ついには何枚も重ねて破いた。日頃ききわけのよいこの子どもが紙を破くのには、何か子どもの思いがあるように感じられて、私も一緒に紙を破くうちに、この子は私に対して自分を守ってくれる人と思ったのだろう。私が少しでも位置をかえると私を追って移動するので、私はこの子からはなれられなくなり、もうひとりの子どもを他の人に委ねてこの子の傍に留まった。

紙を破くのは生産的な活動ではない。破くのをやめるように言えば、この子はやめたろう。しかし内心にはもっと思い切って破きたい気持があったと思う。破ける音、破く手先の感触、紙の破け工合など、何のためにということはなく、音や感触をたのしむこと、ふだんやれないことを思い切ってやるよろこび、それを共にしてくれる大人への親しみ、など。床は破いた紙に埋まった。私も破かせてだけおくことにためらいがないではなかったので、破いた紙を電車に見立てて窓や車をかいたりしたが、それは余計なことだった。この子どもはいわば悪の世界に入りながら、破くイメージをたのしんでいた。この子なりに自分の小さな枠をひとつはずした体験をしたのではないかと思う。次の日、この子に会っ

たとき、この子は私と遊ぶことを求め、帰る時間になったら、涙を一杯ためて、「いいよ、かえるよ」と言ってがまんした。前日の紙を破く遊びが、この子にとって意味あるものであることがたしかめられた。

＊＊　＊＊　＊＊

はじめての幼稚園を見学するとき、私はどこに自分が位置してよいか迷う。どの子どもにもそれぞれの思いがあって動いているのだろうと思うが、最初はそれが見えない。自分が訪問者になるとそのことをつくづくと感じる。ある幼稚園を訪ねたとき、ひとりの女の



子がきれいな包装紙をひらひらさせて、破けてると私に見せた。みると紙のへりがほんの少しささくれ立っている。それだけで破けてるというのだから、その子は破きたいのにそれをできない自制心がはたらいているのかもしれない。もしもこのきれいな紙を破くことができれば、私との間で、この子は何かを乗りこえられるのかもしれないと私は考えた。実際、私がそうしていたら事態は違った風に展開していただろう。私が考えているうちにその子は包装紙を自分の股の間にいれて「おしめ」と言う。私はこの子の家に赤ん坊がいるのだろうと想像した。もしもそうならば、幼稚園にきているときにこの小さなお姉さんを可愛がってあげたいなと思う。何度もおしめをあて、私はその相手をして、おしめを干したりして遊んだ。そのうちにその女の子はどこかにいってしまった。しばらくして気がつくと、戸外のテラスで小さな貝殻に根気よく糸を通している。私のところにきて、針に糸を通してくれという。穴が小さいので私は眼鏡を出して通した。しばらくしてまた針と糸をもってきて、糸がぬけたというので、針の小さな穴に糸を通して結びめをつくってやった。もしかすると、時間をかければ自分でやれるのかもしれないが、大人がそれをやってあげることに意味があるのだろうと思われた。

帰りがけ、玄関まで子どもたちを送ってゆくと、その子の母親が来ていない。その子はひとりで靴をはきかえ、玄関を出て、母親達の群の後の方まで歩いていったが母親が見つからず、自分の部屋の前まで探しにいってテラスに腰かけた。傍に別の子の母親がいる。

私も傍に腰をおろすと、その子は目を赤くして涙がにじんでいる。でも泣かずにその別の子の母親と帰っていった。

あとで担任の先生にきくと、その子の家には最近生まれたばかりの赤ん坊がいるとのことだった。紙が破けてると私に見せにきたそのときから、この子の心には生れたばかりの赤ん坊と母親とが占めていたのだった。

その日の子どもの思い、すなわち、子ども自身にもまだ明瞭に意識されていないがしかし確かに存在する心の思いが、どの子どもにもある。それが行為になるとき、子ども自身にも大人にもその思いが見えてくる。大人がその行為にふれて、その中にある思いに応答して、そのときそのときを過ごすと、子どもの行為は展開し、思いは実現に至る。

保育の実践は、子どもの思いを追いながら思索する生活である。身体を労するだけの仕事ではない。

（愛育養護学校）